〔植探報 Vol. 8 ：29～34, 1992〕

北陸，東北地方のチャ在来種の収集

松元哲・川田真佐枝・近藤貞昭

野菜・茶業試験場茶栽培部育種法研究室

Collection of Local Varieties of *Camellia sinensis* var. *sinensis* in Hokuriku and Tohoku Districts

Satoru MATSUMOTO, Masae KAWADA and Sadaaki KONDO

Laboratory of Breeding Technology, Department of Tea Agronomy,
National Research Institute of Vegetables, Ornamental Plants and Tea,
Kanaya, Shizuoka 428, Japan

Summary

Field survey and collection of seeds and cuttings of local varieties of *Camellia sinensis* var. *sinensis* were carried out at tea garden in Murakami city and Asahi village of Niigata prefecture, Noshiro city and Kakunodate town, Akita prefecture, and Rikuzentakada city of Iwate prefeecture from October 28th to Novenber lst in 1991. During the exploration, seeds and cuttings from seven local populations propagated by seed were collected. The collected materials are planned to be preserved to utilize as breeding materials for tolerance to cold.

According to the description in the literature, tea production began at the 17th to the 18th century in these areas. Tea plants were introduced from Uji area of Kyoto prefecture. The so-called "Murakami-cha" and "Hiyama-cha" are produced at present. After Meiji era, tea production in these areas has declined because of the competition with modernized tea plantation area like Shizuoka prefecture.

In Rikuzentakada city, a famous tea cultivar "Yabukita" was introduced from Shizuoka prefecture at around 30s of Showa period. It has been propagated by seeds. Therefore, it is considered that populations originated from Uji's variety and Shizuoka's "Yabukita" are mixed in this area.

Ecotype which is characterized by small plant with small leaf has been developed from the varieties introduced from Uji area, possibly through the natural selaction caused by heavy snow in winter season in these districts.

KEY WORDS：tea, *Camellia sinensis* var. *sinensis*, Hokuriku and Tohoku districts, cold tolerance

1．目的

東日本のチャの栽培の歴史は文献によれば13世紀には東海道，南関東地方に及び，その後15世紀には越後，信濃，関東地方に広がった。今回収集を行った北陸，東北地方のチャの栽培は，17世紀から18世紀にかけて始まり江戸末期には東北地方の各地で栽培されていた[1)]。しかし明治以降近代的茶産地形成に立ち遅れ，現在では新潟県村上市が経済的栽培地の北限とされている。しかし一部の地域では，リンゴ園の下作等に小規模ながら栽培が行われて現在に至っている[2)，3)]。なおチャの生育の北限は北海道の積丹半島の古平町での存在が確認されている[1)]。

北陸・東北地方で栽培されているチャは，九州・四国地方で自生しているヤマチャとは異なり京都の宇治地方等から種子が導入されたと考えられている。しかし宇治種が丸葉形であるのに対し，北陸・東北地方のチャは宇治種とは異なる樹型や葉形の小さい特徴を持つ。このことは，わずか200～300年の間に自然淘汰を受け豪雪地帯に適した生態型を持つ地方種が形成されたと考えられている[4)]。

現在でも新潟県村上市の他秋田県・岩手県等でもチャの栽培が行われている地域がある。しかし栽培規模が小さくまた開発等で消滅の危険が高い所が多く，これら古くからの在来種を耐寒性育種の素材として収集保存しておくことは重要である。

2．経過及び収集方法

収集は完熟種子を得るため，1991年10月28日～11月１日にかけて実施した。収集した地点は新潟県岩船郡朝日村，同県村上市，秋田県能代市，同県仙北郡角館町，岩手県陸前高田市でFig. 1に示した。これらの収集地点では茶園または庭園で栽培されている集団から種子および穂木を採取した。収集地点の茶園はいずれも実生繁殖茶園であった。また収集した７地点における集団の葉形と種子に関する調査を行い，その特性をTable 1に示した。収集に際し新潟県村上市役所，秋田県角館町役場，秋田県能代農業改普及所および岩手県園芸試験場南部分場にご協力を頂いた。

3．収集結果

北陸，東北地方の茶産地では茶園は在来実生による種子繁殖により増殖を行ってきた。この普及過程においてこれら栽培系統の選抜には耐寒性を除く他の形質には，あまり関心が向けられなかったようである。また新潟，秋田県ではチャの更新期間が非常に長く一度播種して成育したチャは，そのまま栽培されてきた。言い伝えによると樹齢100年を越える個体も残っているという。

岩手県陸前高田市は今回収集した地域の中では積雪が少なく，このため新潟，秋田県のチャが積雪による淘汰を受けてきたのに対し，この地では比較的淘汰圧がゆるやかであったと考えられる。さらに，この地域は昭和30年代に静岡から'やぶきた'を導入して県園芸試験場南部分場で増殖し気仙沼や大船渡に配分した経緯がある。導入した'やぶきた'は約５万本増殖され「気仙の茶」として出荷された。しかしこれらの系統は種子で増殖を行ってきている点や葉形の変

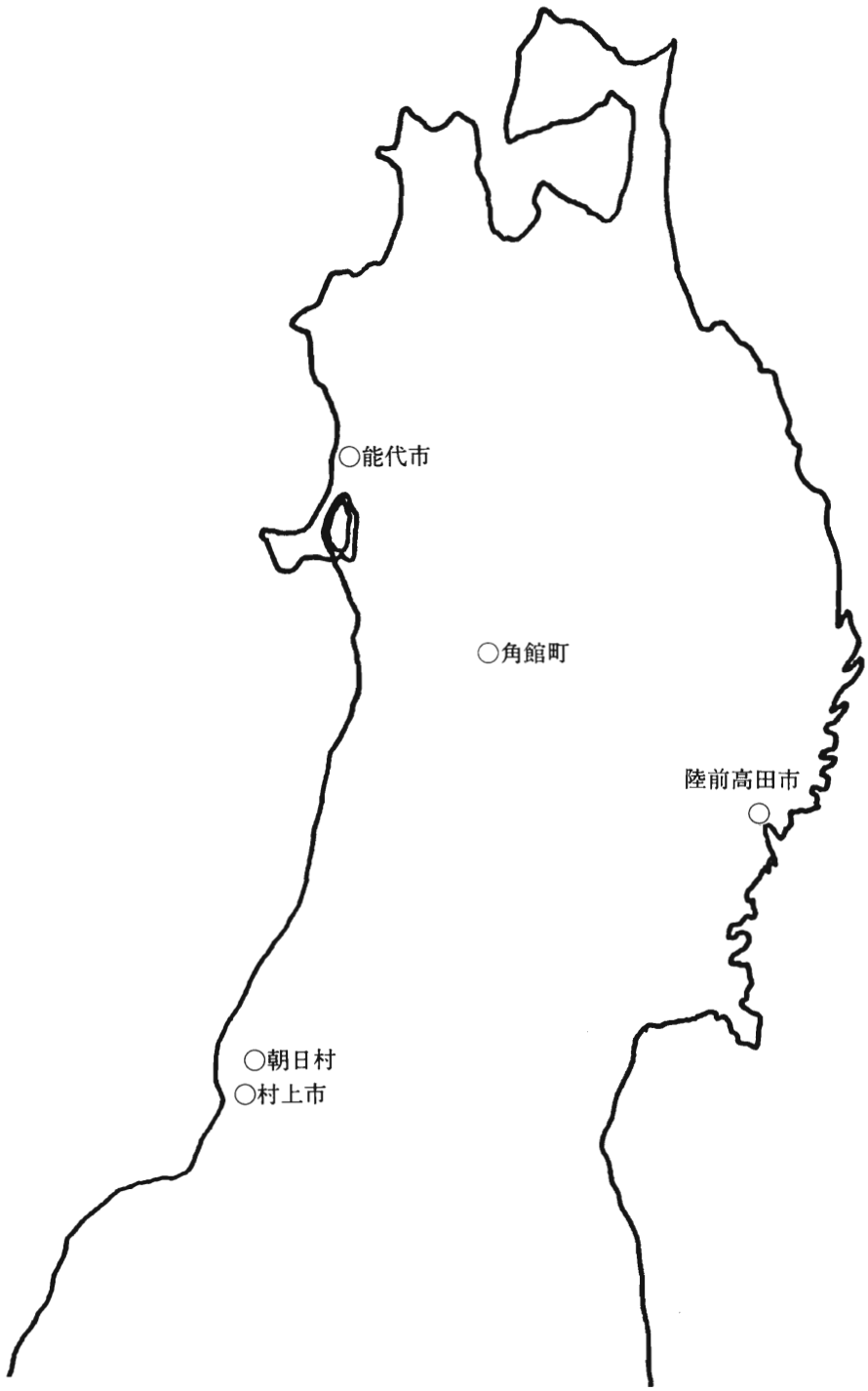

Fig. 1 Collection sites in Niigata, Akita and Iwate prefectures

新潟，秋田，岩手県における各収集地

Table 1 Collection list *Camellia sinensis* var. *sinensis* in Hokuriku and Tohoku districts in 1991.

北陸，東北地方のチャ在来種の収集記録，1991年

収集番号	収集月日	集地
9101	10.28	新潟県岩船郡朝日村　九重氏茶園
9102	10.29	〃　村上市　高橋氏茶園
9103	10.30	秋田県能代市檜山町　梶原氏茶園
9104	〃	〃　仙北郡角館町東勝楽丁　西宮氏茶園
9105	11. 1	岩手県陸前高田市中陣町　中陣地区茶園跡
9106	〃	〃　普門寺境内
9107	〃	〃　高田町　岩手県園芸試験場南部分場

収集番号	収集した各集団の特性					
	葉身長（mm）	葉幅（mm）	葉長／葉幅	種子 重量（g）	種子 長径（mm）	種子 短径（mm）
9101	44.1	21.0	2.10	0.9	13.5	11.5
9102	31.9	16.6	1.92	0.93	14.3	12.1
9103	59.2	28.5	2.08	0.87	12.7	11.2
9104	70.8	31.0	2.28	0.77	12.9	11.0
9105	52.8	22.8	2.32	1.00	13.6	11.5
9106	45.9	21.1	2.18	1.07	14.3	12.7
9107	66.7	27.1	2.46	1.01	14.9	12.7

異の大きさから判断して'やぶきた'の雑種集団であると考えるのが適当である。一方18世紀に宇治から導入された系統は最初に中陣地区に栽培され好評を得，その後種子によりこの地方に広まった経過がある。この導入された'やぶきた'中陣由来の在来種の茶が製品として区別して取り扱われなかったことを考えると，両者を区別して栽培管理されていたとは考えにくく，この地域には宇治系統と'やぶきた'系統が混在していると考えられ，在来種の取扱いに注意を払う必要がある。

各収集地点とチャの栽培状況は以下に示す。

1）新潟県岩船郡朝日村

収集した茶園は数世代を経た在来実生茶園で現在でも経済的栽培を行っている。

2）新潟県村上市

現在でも村上茶として経済的栽培を行っている地域で茶園のチャは，かなりの年数を経ており（言伝えによると樹齢100年以上），湿地のためか生育はあまり良くなかった。また葉形が小さいのが特徴である。

3）秋田県能代市

檜山茶と呼ばれ茶園としては日本最北端に位置し，日当りが良好で野菜との混作が行われ，生育は良好であった。

4）秋田県仙北郡角館町

武家屋敷の庭園中に植えられているチャから収集した。角館のチャは葉形が宇治種の特徴である丸葉である。

5）岩手県陸前高田市中陣地区

中陣地区は18世紀に宇治地方から種子を導入した地域である。

6）岩手県陸前高田市普門寺境内

普門寺は中陣地区で栽培された茶園から種子を播種した集団である。

7）岩手県園芸試験場南部分場

昭和30年代に静岡から導入された'やぶきた'とされている。

4．収集材料の今後の処置

1991年11月に収集した穂木および種子はバットに播種し現在ガラス室内で育成中である。今後，各集団からランダムにサンプリング後個体を養成し定植する。定植後遺伝資源としての特性評価を行う。

5．所感

今回収集した地域は古く17～18世紀からチャの栽培が行われており，江戸時代末期には新潟の村上茶，秋田の檜山茶，今回収集を行わなかった青森の黒石茶等の産地を形成していた。この時代茶の製造は藩の士族の救済事業として行っていた面もあり，現在も一部の旧武家屋敷や寺院の庭園にチャが残っている。中には村上市のように経済的栽培を行っている所もあるが，

1）この地域は寒冷地であるため栽培環境が不利であること。2）明治以後交通網の整備による流通の発達が，かえって静岡等の高い生産力茶産地との競争に不利に働いた点。3）東北地方の在来実生園は規模が小さく地方市場を対象としたため品種の選抜や栽培技術の開発等の経済性を追求した近代的茶園経営が余り行われなかったことにより次第に姿を消していった[2)]。今回の収集地は規模は小さいがチャの栽培を続けている地域である。

北陸，東北地方に導入された宇治種が積雪地帯に適応した生態型を持つ地方種を形成していった過程は興味深い。しかし現在，チャが生育している所が開発等によって次第に消えつつあり今後も収集を続けていく必要がある。

今回の収集でご協力下さった皆様また快く種子や挿穂を提供して下さった農家の方々に心より感謝の意を表します。

引用文献

1）大石貞男，日本茶業発達史　農文協　1983
2）大越和郎，北限の茶産地（1）茶　25（7）　1972
3）大越和郎，北限の茶産地（2）茶　25（8）　1972
4）鳥屋尾忠之　チャのルーツをめぐって発祥地と伝播（3）　茶　11　1988

4．北海道に自生するヤマグワ系野生桑の収集

北海道の野生桑

収集した野生桑の接木苗

5．北陸，東北地方のチャ在来種の収集

新潟県村上市の茶園

岩手県陸前高田市の茶樹